

里の異文化交流の可能性 - マイナスをプラスに転換するきっかけづくり -

山形県内陸北部の山村、角川の里。ようやく稲刈りも終わり里の人々もほっと一息、里山でのキノコ採りや炭焼きなどに仕事の重点を移し、そろそろ冬ごもりの準備に入る季節になった。

従来、角川の里では、冬といえば3mにもなる積雪に閉ざされ、家の中にじっと閉じこもって、時折近所の人とお茶のみをするという暮らし方だった。だがここ数年で変化が起きている。外部者を受け入れた活動がこの時期に増えてきた。様々な機会を利用して、雪の少ない地域からわざわざこの季節を選んで角川を訪れるようになったのである。

最初地元住民は疑問に思った。「なぜこんな寒く、しかも雪が多くて不便で何も無い時にわざわざ来るんだべか？」しかし交流の中で、外部者にとっては何も無いところが興味深く価値あるのが冬であり、そしてそれが実は住民の地域生活にとってもかけがえのないものでもあるということが分かってきた。

例えば、関東地域から来た農業関係者の話からは角川の里では雪が深いからこそ、他の地域では問題となっている獣害の被害があまりひどくないと言う。九州から来た地域づくりに取り組んでいる方は、春から秋にかけての里山資源を上手に保存し、冬に多彩な郷土料理があることに驚いたという感想を話され、地域の伝統料理がいかに価値を有しているかということを見直しさせられた。ゼミで訪れた大学生たちは、地元の人たちが薪ストーブで暖をとりながら栗を焼いてお茶のみをしている様子を見て「最高の贅沢ですね」と感想を漏らしていった。都会から訪れる子どもたちは何と言っても雪遊びが魅力で、雪さえあれば一日中でもそり遊びやかまくら作りを楽しそうにしていた。

このように地元ではマイナス以外の何物でもないと認識されている冬が、他の地域や文化圏の人々にとっては魅力的であるかもしれないということが分かってきたのである。いやそれだけではない、地元の人々にとっても実は日常の衣食住の様々な暮らしを支えてきたかけがえのない季節なのかもしれないということが認識されるようになってきたのである。

筆者は近年東北各地の農山漁村を地域づくりの仕事で訪れるようになった。どの地域に行っても筆者にとっては心惹かれる魅力的な素材を見つけることができる。一方でどの地域でも地元の方からは不便さなど様々なマイナス面の「愚痴」を聞く場面に出会う。だが、もしかするとその愚痴の要因になっている地域の不便さこそ、逆にその地域独自の資源や価値を支えているものなのかもしれないのである。

行政や大学などが主催する地域づくりワークショップでよく見られるのは、地域の課題や問題を抽出しそれをいかに克服するかという議論だ。その結果ずっと愚痴で議論が終わってしまうこともしばしばだ。そうではなく、地域の良さや価値を見つけそれを力づけていくこと、マイナス要因こそ逆手にとってプラスに転換していくという発想が大切なのではないだろうか。そのためにも他の文化圏や地域の方々との交流の重要性を感じる。必ずしも

専門家を招くことが必要だとは思わない。よその普通の人々とのいわば日常の暮らしの中における「異文化交流」こそ真に地域に根差した価値や地域づくりの方向性の再発見につながる。

先日、今年の冬の角川の活動計画案を見て、筆者は微笑を禁じえなかった。そこには保存食材を使った納豆汁、冬の山仕事である杉の枝打ちや間伐、マタギのおじさんが指導するかんじきハイキング、薪ストーブを利用したなべ料理などの企画が出ていたからだ。これまでは不便だと感じていた冬の日常生活を工夫した素晴らしい暮らしのプログラムが、住民の手で生みだされていたのだった。